

第1分科会

人権確立をめざす教育の創造
部落問題をはじめとするさまざまな
人権問題の解決をめざす教育をどう
創造しているか

②分散会

基調提案

協力者からの基調として自身の部落差別に関する地域・学校での取組が紹介され、その中で、差別の現実が、社会問題として存在すること、目の前で向き合っている子どもの学力の問題、生活実態、家庭が抱えている課題の背景を探っていくと、そこには部落問題が提起する教育課題が未だ完全に解決されていないという事実があることが語られた。そして、全人教が大切にしてきた同和教育の実践のノウハウは、部落問題だけではなく、特別支援教育、発達一障害、外国にルーツをもつ子どもが背負わされている課題、現代的な貧困の問題などにも通用するものであり、討論で深めていきたいと提案された。

そして、第1分科会の討議の柱を確認した。

—報告1—⑩

「愛もみんなと一緒に歌ったり踊ったりしているのですね」
(愛媛県人教)

—主な質疑と意見—

石川 愛くんの言葉の遅れや、身体の状態を、周りの子どもたちは、どのように捉えているのか。

報告者 4月に始まった時には、「小っちゃい子が入っとるね」「愛ちゃんって4歳なん?」と言った子もいます。「愛ちゃんは、これから大きくなるんよ」という話をしました。ごはんも、きれいに食べられず、手づかみだし、スプーンでもボロボロ落とします。「どうして上手じゃないん?」と言った子もいました。「これから上手になるんよ」と言いました。「障害があるから…」ということ子どもに言っても意味がないと私は思っていましたし、担任も、そのあたりのことは上手に言ってくれていました。周りの子どもたちは、大人以上に冷静に見ていたと思います。「愛ちゃん、今日はできなかったけど、また今度できるようになるよね」という話もありました。大人と同じように外見や動きなどを冷静に分析していたと思います。

京都 本人やお家の方は、小学校で、どのようなことを大変だと思っていたのか。保育園と小学校の連携で、どのようなことが引き継がれたのか。

報告者 7月にお母さんが保育園に来てくれた時、「小学校どんなん?」と聞いたら、「愛くんは、できてもしたくない時があったり、できないけど

したかったりとかがあって、日々小学校を楽しんではいるんだけど、泣いたら許してもらえるところもあるんじゃないか」と、お母さんと言っていた。1学期は、とにかく学校に行き、部屋にはいるけれど、先生との意思疎通の取り方、言葉が分かりにくいし、喋りはするんだけど発音の問題もあるので、愛くんの気持ちを分かってもらうまでの大変さを感じたと言っていました。「体力的なこともあるので、ちょっとしんどくて休んでしまうと、次に行きたくないとは言わないけれど行きにくくなって、学校に行ったら泣くんです」とお母さんと言っていた。通級で、愛くんが授業に参加できるところは参加して、あとは別のクラスで勉強する。連携については、幼保小連絡協議会があり、私は園を異動したので、詳しいことは、愛くんの連携の中に入っていた職員から答えてもらう。

愛媛 愛くんの年長の時の様子について、小学校との引き継ぎは、発達支援課がつくるサポート会議に保健師が関わっての連携を引き継いでもらう。学校では、一年生との交流学习の時に愛くんの様子を見てもらう。2月には、学校給食と一緒に食べる時に食事の様子を見てもらって、担任から、詳しく愛くんの様子を見ながらの引き継ぎをした。トイレの時の声かけも、「このように声かけしたら愛くんはできますよ」と保育園の方から伝えている。学校選択の時も、発達支援課とお母さんと保育園と三者で、何回も会を重ねながら、小学校の支援学級へということをお願いさせてもらった。

大分 2人の発達障害の子と関わった実践を紹介します。リコーダーで指が全然動かないAが今4年生で、その弟のBが今2年生。私が取り出し指導をした。最初にやったのが、レポートの中にありました全身運動を使っての音楽。また、腹筋・背筋・踏み台昇降とか、彼の体幹を鍛えるトレーニングを、国語の中の最初の5分ぐらい半年ほど入れた。半年ほどで教室の椅子に座ることができるようになり、鉛筆も持てるようになって、授業に関わるようになった。一番変わったところは、お母さんが、子どもが学校で学習していると聞いて安心するようになったことと、周りの子どもたちが、Bのがんばる姿を見て、「がんばってるね」と思えるようになったこと。レポートの中に職員の連携があったが、やはり、私に関われる校内の体制が作れたことが良かった。私の学校では、子どもたちへの支援に応じて取り出しをしたりだとか、集団活動をしたりだとか、日課表を変え、子どもの状態に応じて人の配置の工夫をした。今4年のAも、腹筋や背筋や逆立ちをして体幹を鍛えることで、リコーダーを吹けるようになってきたのかなと思っている。

協力者 今の実践の中に、職員の連携や校内の体制についてのお話があったが、愛くんを受け入れるにあたっての連携や校内体制は?

報告者 保育園は、職員が24人で、正規もいれば臨時職員もいて、保育経験もいろいろ。クラスを運営する時に、どの先生とどの先生にもってもらったらうまくいかなんかということ是非常に考えた。それから、連携するには、週案会、職員会は必ず月一回、ちょっと困ったことがあったら朝のミーティング、夕方のミーティング、昼休憩の話し合いで「ちょっとこんなことがあってね」という話し合いは、かなりしました。担任が会場にいますので、どんな気持ちで保育していたのか話してもらおう。

愛媛 愛くんと初めて出会った時のことがすごく思い出される。これからどうして愛くんと接したらいいんだろうというのが、すごく頭にあって、加配の先生とも「どうしたら、愛くん、前に進んでいこうか。どうしょっか」という話をした。私たち3人だけじゃなく周りの人の助けがなかったらできなかった。愛くんと1年間というのは、すごく自分の心の中に残った1年だったと思うし、今日実践発表していただいている報告者の助言もすごく参考になって、前向きに取り組めるようになった。

—報告2—⑳

「ぼくだけ？」から「ぼくも」～一人ひとりが認め合い、高め合う集団をめざして～

(大阪市人教)

—主な質疑と意見—

大分 いろんな取組の中で、他の子どもたちがシャオミンとリーホンにどのように接していったのか、先生自身の考えや取組が変わっていく中で、2人と周りの子どもたちとの関係がどうなっていったのか。

報告者 私は常に子どもたちに『縁』を大事にしていると話している。そして「このクラスの中の誰ひとり欠けても、このクラスは成り立たないよ」と伝えている。今回も、シャオミンのことが最初気になったので、シャオミンが孤立してしまわないように、常に中心にシャオミンを置いて、シャオミンが困っていたら私が率先して声かけをした。その中で1年前はシャオミンとリーホンが2人で話しているっていう場面が多かったが、最近では周りの子どもたちも、一緒になって関わって楽しく笑顔で遊んだり、過ごしたりしている場面が多く見られるようになってきた。今年引き継いでくれた担任も、すごく上手につながってくれているので、そういった変容につながったのかなあとと思う。

大阪 報告校と同じ校区の中学校。本校でも、今年、中国から来て、日本語教室に通っている子どもたちが3人いる。5人の1年生が初めて来て、すごく困ったが、中国出身の先生がいて、通訳してもらっている。学校の中に子どもたちの居場所がつかれず、不安な状態だったと思う。教室では、なかなかコミュニケーションができない。週一回の会をつくった。そこでは中国語がいっぱい出て、

教員が教えてもらいながら進めていくという状態だった。でも週一回、自分たちの話せる場ができて、そこからちょっとずつ安心して授業の方にもクラスの方にも学年の方にも入っていきえるようになった。小学校の時に、報告のようなつながりをつくってもらって、そういう子どもたちが中学校に来るということはすごくありがたいことだ。

奈良 本校にも外国にルーツをもつ子どもが数名いる。昨年度、外国にルーツをもつ子どもを中心に置いた取組をした。その中で、本校に設置されている避難所の看板について、ベトナム、フィリピン、ミャンマーの子がいるが、それぞれの国の言葉を入れた看板が設置されていないということで、子どもたちが看板づくりをして、今、校門に設置している。そのように、学校全体を通して取組を進めたが、2年生の取組の他にも、外国に関わる取組がありますか。

報告者 学校全体では、まだまだ手探りの状態。大阪市の他の、外国にルーツのある子どもたちの多い学校と情報を共有しながら、どんな形がいいのかなあと教職員で話し合いをしている。今年度から、中国語の堪能な職員を母語支援員として、日本語教室に通級するのは別に、校内で週一回だが、母語支援員と1対1の通級の取組をしている。普段の日常会話はなんとか通じるレベルですが、授業の中の専門的な言葉となると厳しい子どもたちが多いのが現状。あと、保護者への発信ということで、先ほど看板づくりの話があったんですが、本校では、英語と中国語、やさしい日本語で保護者に手紙、行事のお知らせをしている。

協力者 今後、外国にルーツを持つ子どもが増えてくることも予想されるが、その子たちの学校の中での居場所づくりの取組を聞かせて。

大阪 本校には日本語教室があり、他の学校から子どもたちが通ってきて日本語を学んでいる。中学校にも外国の子どもたちがいっぱい来る。日本語教室に通うが、兄弟で同じクラスではどうかなあとも思う。そこで、まず算数の学習を職員室で1日1時間週に3時間、3年と5年の中国の兄弟が私と一緒に勉強する。日本語教室では生活の言葉を学び、職員室では、例えば算数の「ぜんぶで」とか「あわせて」とか「どちらが多い」とかいうような学習をやっている。その時間が、兄と弟が会える時間なんで、とてもうれしそう。今3か月ほど過ぎて、徐々に声も大きくなってきて、職員室でやってたら、ちょっと邪魔になるかなあと思うぐらいになってきた。

—報告3—㉑

「今日はAちゃん来るかな」～思いが繋がる学級集団づくりをめざして～ (滋賀県人教)

—主な質疑と意見—

大阪 ①修学旅行前に、友達をつなげるコーディネートはどのようなことをしたのか②雰囲気だけだったら他学級になった時に、雰囲気が変わっ

てしまうと行動できなくなると思う。そこで、「なぜ人を大切にしなければいけないのか」を考えさせる授業など何か具体的な指導の場面があったのか③最後に、卒業した後彼女が輝ける仕掛けが何かあったのか。

報告者 まず一つ目の、修学旅行前のことなんですけれども、私自身、修学旅行は学級明けから1か月ぐらいで行くので、1か月間で子どもたちを見とるということも、なかなか難しいところもあったが、前年度からの引き継ぎで、Aが心を許せて話せる友達を一緒にグループにしたり、グループの子たちにも、A独りになったらさみしいようだと言っていた。同じ部屋の子たちにも伝えていたが、Aちゃんを独りにさせてたんだなあということ、Aちゃんの泣いてる姿で初めて実感した。

人に対する温かさが無いなあと感じたのは、授業中に隣の子が「分からへん」って言うてるのを、自分は自分、他人は他人という素振りも見えたり、朝「おはようございます」って私には言ってくれるんですけども、友達にはそういう挨拶がなかったり、「ありがとう」とか「ごめん」とかが少ないなと感じていた。だから、例えば学級で一人でも分からへん人がいたら、その子のためにみんなでなんとかする、みんなで学んでいこうという取組をした。また、誰ひとり見捨てへんのやでっていうことは常々言っていましたし、私自身が行動で示すようにした。

あと、3つ目なんですけれども、周りの子とAちゃんをつなげるということにすごく私は重きを置いていたので、周りの子にはAとどう関わっていくかということを考えさせていたので、A自身に付けられた力ってそんなになかったのかなあって反省をしている。中学校に上がったAは、1学期は学校には頑張ってる通っていたが、3学期頃には休みが続くようになったと聞いている。

奈良 別室に登校している時期のAの話ができて、そこで対応されている先生から「修学旅行に行きたくない」という話を聞いたと聞いたんですけども、別室でAの対応をしている先生と、どういうふうにやりとりをしていたのか、別室に行ってる時に支援に入っていた先生が、どういうふうにAに関わりをもったのか。

報告者 支援に入った先生とは、ほぼ毎日放課後や時間のある時に喋った。今日何時に来て、こういうことを別室でやっていたんやという話も聞きますし、私自身が空いている時間に別室に行っ一緒に勉強するっていうこともあった。その先生がいるとAは安心するし、A自身、多分私には言えへんことも打ち明けてて、それをその先生から聞くということもあったし。いろんなことを教えてもらった。

三重 ①レポートを読ませていただいて、子どもへの見方とか関わり方とか、フットワークの軽さとか、そういったものが、支援員をさせてた時の子どもとの出会いが大きかったんかなって

思うんですが、それ以外の何か先生の元になっているものみたいなのがあったんじゃないか。②先生が、Aを中心に仲間づくり、クラスづくりをする中で、Aの姿を見ながら、他の子にも自分のことをしゃべったりとか、A以外の子も支えようとする子とか、そういう広がりがあったのか。

報告者 ①気になったらすぐに家庭訪問に行く、連絡する、連携を密にするということは、初任校の先生、それから子どもたちに教わりました。これは私にとってとても大事なことです。②A以外への広がりも大事と思ってる。しんどい子に関わるのは、きっかけの一つとして、自分のAとかBとかCとかDとか、A以外の友達に対しても、Aのような関わりができるかっていうところは、私自身もすごく大事やなあって思っている。A以外にも、不登校傾向の子もいましたし、友達と関わりが難しかった子もいました。休み時間に喧嘩があったっていう時に、そのことを学級で喋った時に、問題を学級の問題として捉え、仲いい子にも「あかんことはあかん」と言えてましたし、しっかりみんなで支え合っていこうという姿は見られていた。4月当初は、人に対して希薄な部分があったけれども、徐々に見えていったかなと思ってる。

大阪 周りの子たちも育っていたんだろうなっていうことを感じます。その中で、先生が具体的に仲間づくりの取組を他にも重ねられていたのか教えてほしい。

報告者 仲間づくりの取組は、日々のことなので、自分でも、それを意識してやってることややってないことがあるが、子どもたちと過ごす時間をすごく大事にしたと思ってる。個別にいろいろ喋りました。もちろんAとも喋ったんですけども、子どもたち一人ひとりの思いは何なんやろって、子どもたちが今このことで困っているとか悩んでいるとか、個別に喋って個人的で終わる話もあったり全体に返す場面もあったり、そんな活動をとおして共有できることを一つでも多くつくっていこうと意識してやりました。

大分 先生のレポート見ながら私が考えたのは、自分ができたことはやはりみんなに伝えなきゃいけないんだけど、前と後の先生たちに関してはやはり一緒に考えていかなあかん。見とりって難しく、本当の原因はどこにあるのかはすごく難しいと思うし、この頃考えるのは、不登校っていかんのかなっていうのを考えます。学校に来ることが幸せなのかなっていうこと、うちは4人子どもがいますが、一番上の子は高校中退、辞めて今働いていますけども、なんか楽しそうです。一番下の4番目の女の子は、なんか急に学校行かなくなりましたが、なんか楽しそうです。学校が楽しいところであることは伝えなきゃならないんだけど、不登校が悪いのかなって、ちょっと考えさせてもらいました。

報告者 私自身も、Aちゃんもって、次の年も不

登校の子もって、今年もまたそういう子が学級に
いるが、本当に理由って様々で、もうこれやって
特定はできない。あと、おっしゃったように、こ
の子たちを学校に来させる、通わせることが本当
にこの子たちにとってプラスなのかっていうこと
も考えました。でもそれでもやっぱり私は放っ
ておけないので、なんとか一緒に頑張りたいなと
思う。

1日目の総括討論A

協力者 3本のレポートに共通していたことは、
集団は高まっている、居場所はできている。けれ
ど、もう一歩踏み込んで、中心のその子たちと周
囲をどのようにつなげていくのかというところで、
もう少し実践の交流を深めていけたらなと思
う。

滋賀 特別支援学校に勤務している。3本のレポ
ートを聴きながら、自分自身どうしていったら
いいのか、課題とか、この場でいろいろな方の意
見を聞きたいと思って発言する。当事者とのつな
がりですが、当事者の変革、当事者自身が、学力を
つけたりとか、変わっていくことも大切だけど、
差別を考えた時に、差別をするのは、その周りの
人間がする、社会の側に障壁がある。そういうこ
とを変えていくっていうことが大切と思う。とし
た時に、障害のある子の場合は、特別支援学校に
勤めておりますので、ほんとに別の場で毎日生活、
教育しているわけですけども、そうではなくって、
できてもできなくても、その居場所をどういうふ
うにつくっていくかということ、支援学校から、
地域とか、地域の違う学校に、どういうふうに伝
えていくんだろうっていうことを思う。今回のレ
ポート、明日にも関わるかもしれませんが、何が
変わっていったことなのか、何を子どもたちじゃ
なくって、私たち大人が、制度もあると思います
が、そこに向けてされたことで、難しかったこと
もたくさんあると思うので、困られたこととか、
悩まれたこととかも含めて聞かせてください。

〇〇 具体的な実践というか、私自身もまだまだ
経験が浅いので、これだっという意見はなかなか
難しい。3本目にあった不登校の子であっても、
保護者の理解も含めて、自分自身がしんどいつ
て言えて、そのしんどさを周りの子たちが、その子
の気持ちになって受け止めて、僕自身もしんどい
ことあるねんっていうふうに伝え合いながら、僕
ら自身もそういうことってたくさんあると思う
ことが大事。そういうことが大人になった時に、
先生とか周りの友がいなくても、しんどい時し
んどいつて言える、言い合えるってというような経
験が、その子自身も大きくなって、大人になっ
ても自分自身がしんどいつて言いながらも生きて
いけるような大人に成長していけるんじゃない
かなって感じながら実践を聞いていました。

三重 まず自分らがその子のことを知らなあか
んなって思う。以前担任してた6年生の女の子な
んですけども、自分のことは全然喋りませんでし

た。学習もあんまり意欲がなかったし、地域でや
っている地区学習会の学習にもそんなに意欲的
になれなかった。その子が3年生の終わりぐらい
に父親が家を出て行ったんです。そのことで母親
とその子は話ができてないので、なんかすっきり
してない、もやもやしたものがある、勉強よりも
そっちが気になる、人権学習よりもそっちが気
になるっていうのがあった。僕は、きちっと母親
からその子に、父親が出て行った背景などきちと
話したら、その子は元気になってくるかなと思っ
ていた。実は、その子は、父親が出ていったんが
自分のせいやと思っていた。そのことをある日作文
に書いてきて、その子と話して、母親と話して、
「そうやないんやで、あんたのせいとちゃうんや
で」っていう話をしてもらって、なんかちよつと
楽になった。それから友達に自分の父親について
「なあなあ、私のお父さんなあ」っていう話がで
きていたり、クラスで話ができていたりして、
クラスの中で居場所ができたっていうのが過去
にありました。だから、やっぱり自分たちが、子
どもの暮らしも含めて、本当にその子の生活課題
は何なんだということ知ることが大切と思う。

大阪 今発言された三重の先生のお話を聞きな
がら同じことを思っていたんで、発言させてもら
います。3本目のお話で、ほんとにその子はなぜ
独りぼっちになってしまうのがそんなに怖いの
かというところは、この子のしんどさじゃないん
かなって思う。お母さんの話もすごく気になっ
ていて、あまりステップアップしないでほしいだ
とかおっしゃっていたお母さん、この子とお母さん
の関係だったりだとか、この子の暮らしをもっと
自分たち知っていききたいなあっていうふうに思
う。今、自分は発達障害がある子を担当してるけ
ども、その子はいろいろ納得がいかないことがあ
ると暴れたり、暴言だったりを繰り返す。ただそ
の子と落ち着いて話をしていると、僕はずっと周
りからそういうふうに使われてきている、幼稚園
の時からそうや、周りの保護者、誰々のお母さん
たちにもそういうふうに使われ続けている、自分の
親からもそうやって使われ続けている、っていう話
をしてくれる。それを最初は僕が受け止めるんで
すけど、そういう話を誰か一人でもいいから、子
どもたち同士の中から、その子がその自分のしん
どさを語る仲間をつくってほしいと思って、今
それを、その子と一緒に探している。誰だったら
僕の話を受け止めてくれるかなあ、こちらも、
誰にでも話していいようなことでもないと思
うし、それはそのことをこの子だったら受け止めて
くれるという安心感をもって打ち明けられる仲
間を一人でいいから、でまたそこから増やして
っていうふうにできたらいいなあ今取り組んで
いる。

兵庫 今、通級の担当をしている。私も不登校の
お子さんと関わっているけども、先輩の先生から
言われたのは、一人でも学校の中でその子を理解

する人がいたら、その子を救うんだということで、不登校の子には、その子の好きなことを通して話を聞いている。どうやってつなげるかということですけど、今日の実践でいろいろ成功した事例がいっぱいあったと思う。その子と周りの子どもが関わったという体験は、すごく双方にとって貴重な体験で、スキルを獲得したんじゃないかなと思う。ですから、不登校のその子の好きなことを通して話をするんですけど、好きなアイドルの話だったら、好きなアイドルのことを通して他の子どもとつながっていきけるかもしれない。誰か一人必ず増やしていくということが、同じ学校の保健の先生であったりとか、スクールカウンセラーの先生であったりとか、学習支援の先生であったりとか、そういう先生を増やしていくということで、不登校の子どもたちと関わっています。仲間づくりということなんですけど、さっきLGBTの話もあったんですけど、やっぱりアセスメント、評価、その子をどういうふうに見立てるかというのがまず大事なかなあと、今日の討議の柱とはちょっと違うかもしれないですけど、そんなふうに思いながら今日の話聞かせていただきました。

—報告4—⑥

「怒らないで言えたよ」 (滋賀県人教)

—主な質疑と意見—

兵庫 二学期になると、Aが一学期のように大きな声で元気におはようと言う姿がなくなり、不機嫌な時には、人がいやがることやいけないことをわざとすることが増えたっていうことの原因は何なのか。

鳥取 原因についてレポートの方で読み取れたのは、一つは、父親が妹をかわいがるっていうことがあったが、先生方の話し合いとか、あるいは保護者さんとの連携とかで、原因が愛着障害のようなことなのか、あるいは他にもあるのかということが知りたい。

熊本 保護者との関わりについての関連なんですけど、多分、このレポートをすることで、お母さんとかお父さんに、このレポート発表するよ、とか、レポートを見せられたと思うんですけど、お母さんの反応とか、Aをお母さんがどのように育てていこうかなあっということをお母さんに教えてください。それとあと全く別の質問なんですけど、「怒らないで言えたよ」っていうと、高校になったら結構自己主張の強い子になっちゃうと思うんですけど、周りの子に気を配れない、そういったところができちゃって、トラブルを起こしかねないような、高校に来たら、そのような子になっちゃうと思うんです。なんで「怒らないで言えたよ」っていうレポートの題にされたのか。

報告者 2学期に入って夏休み明けたら急にね、1学期は天真爛漫で「おはよう！」って来てたのが、初日から静かに来るようになったのが、なぜだかは私には分からなかったんです。長い夏休み

の間、ずっとおうちでね、お母さん、おうちの家族と一緒に暮らしてはるし、幼稚園に来ないので、幼稚園は夏休み長いので、その間に何があったのか分からなくて、お母さんにも、別に「何があったんですか？」と、そんなことも聞いてなくて、「前は1学期は元気に、おはようって来てたのにね」っていう話をお母さんとしてたんですけど、原因はやっぱり分からなかった。今、年長になってからも夏休み明けにちょっと一つ心配なことがあって、なんかやっぱりおうちのストレスがあるのかちょっと分からないです。ここちょっと地元なので。先ほどの、おうちの方にはレポートを見もらったのか、という質問があったんですけど、おうちの方には、こういう発表します、私がどういうふうに悩んで、私自身がこう勉強させてもらったというレポートを発表させてもらいますとは言ってたんですけど、中身までは読んでもらってないんです。原因も結局は分からなくて、だからそれはもっと探ったらよかったのかなと思うんですが、年長になってからも、なんか休み明けにちょっと体調が変わったことがあったので、やっぱり何かあるのかなと今思っているところです。

先ほどちらっと妹だけをかかわいがるっておっしゃったんですけど、そうじゃなくって、たまたま妹さんを抱っこして、お姉ちゃん抱っこしてもらえなかっただけで、姉妹で差をつけてはるわけじゃないと思います。今妹さんは下の3歳児クラスに来て、二人で登園してくれてはるんですけども、お母さんはとても真面目で一生懸命でいいお母さんなんです。職員では愛着障害とかそんなことはないと思っています。ただ、あのう、お母さんがね、子どもへの関わり方が真面目なので、人に迷惑かけちゃいけないから、とかそういう言葉はよく声かけられているというのはあります。

「怒らないで言えたよ」っていう、なぜ題名にしたかというのと、年長になってから、年小の時、年中の時は、すぐ怒ってて、それがなかなか変わらなかったAが、年長の1学期の中頃に、自分で「怒らないで言えた」って自分が変わった自分、変わった自分に気がついたっていうそんなすごくいいなあ、素敵だなあって思ったので、題名にしました。

熊本 お母さんが、Aをどのように育てたいっていうのは、聞き取れてはいるんですか。

報告者 地元なのでちょっと言いにくいですが、お母さんは一生懸命で、他の親ともとても仲良くやってらして、でも自分の子どもに対しては、人に迷惑かけちゃいけないから、何か子どもが触ろうとしたら「だめっ」って感じで、頭ごなしに言うところがあったかなと思います。私はお母さんがどんなふう育ててきたか聞いたことがないので、そんな私が言えることではないかなあと思うんですけど、幼稚園の中で、そのお母さんが、Aに対して関わっておられる姿を見て

いる限りでは、一生懸命で真面目なお母さんなので、やろうとする前に制止してしまったり、「Aちゃん！」って声をかけてしまうってところはあつた。あとはいいいお母さんです。分かる範囲ではそれぐらいです。

滋賀 特別支援学校で勤務しています。「怒らないで言えたよ」っていうAの思っているのは、すぐこう胸にきたっていうか、怒って言うてることを注意されたりとか、それも自分ではあかんって思いながら、でも自分の思いがうまく言えないAが、先生方や友達との関わりの中で受け止めてもらいながら、少しずつ少しずつ友達ともつながり、自分を信じてもらえる先生を信じながら、一步一步成長されてる様子を感じた。私自身、特別支援学校で、うまく表現できない生徒たちと共にやっていく上で、行動自体は注意したりしないといけないことかもしれないけれども、なぜそういうふうにならざるを得ないのかっていうところをしっかりと見ていかなければいけないなあとということを学ばせてもらった。あと、子どもたちの行動であつたりとか、集団の中での様子に課題があつた時に、その背景を、一緒にどんなふうなところでそうなつたのかということを考えていかなければいけないと思う。私自身も保護者の方と悩みを共有したいと思いつつも、その子のために思つて言つたことで、とても保護者の方に辛い思いをさせてしまつたりとか、でも一緒に考えていくっていうことを続けていくことが大事かなあつて思つてやっています。実践としては、家庭訪問する、その子の背景を知る、その子がうまくできない行動ではなくて、どのような思ひで、どのような悩みの中でそれをしてるのかっていうことを知ること。私自身も、自分の思ひで突っ走つて、他の先生方とうまく協力し合えなかつた場面もこれまでありましたので、その部分を、レポートを通じて、もう一度自分の実践の中でやっていきたいなあとというふうになつた。

石川 Aが、どうしてこんなに怒つたり、注意とかを素直に聞けないのかなあつていうのは、多分お母さんの関わりっていうのがあるのかなあつて感じました。私は今特別支援学級の担任なんですけども、これまで低学年の子どもたちを担任してきて、どうしてこの子はこんなふうになつて怒つちゃうのかなあつていうのをいつも思ひます。さつき聞いたお母さん自身がとっても辛いところがあるんじゃないかなあつて。人に迷惑をかけちゃいけないから、Aを執拗に事前に叱つたりする。どうしてお母さんはそこまで、自分の小さな子どもに対してするんだろう。そりゃ誰でも人に迷惑かけないようにしていこうとは言ひう。でも基本、私自身は人にいっぱい迷惑かけて生きてきたし、そういうものも許せるというか寛容というか、一緒に生きていくためにはいいことかなあつて思ひます。お母さんがどうしてそんなふうになつてしまったのかなあつて。これまでで何かやっぱ辛いことが

あつたり、なんかそういうところを話をしていったらいいかなあと、話してもらつてもすぐには解決にならないけど、一緒に考えていきましようねつていうところでやっていきたいなと思ひます。

大分 Aが、うちのクラスの、みいちゃん(仮名)そつくりで、どんな実践をされたかなつていうのをちょっと生で聞きたいと思つて来ました。うちのクラスのみいちゃんも、今4歳児、年中さんです。レポートの、2学期の姿がまさにみいちゃんの1学期の姿でした。少しいやなことがあつたりすると、すぐにもう「きらい」「もう友達じゃない」「やめる」というやりとりがあつて、それに対して私にも「きらい」つて言い返す、全てトラブルが周りに飛び散つてしまつて、結局みいちゃんが独りで落ち込むという姿があつたんです。レポートにも書いてるんですけど、よくない、これじゃだめなんだと分かつてるんですけど、そのやり方しかみいちゃんの中にはなくつて、いくらその時に、「こうするとよかつたよ」とか「これはだめだよ」つて言つても、やっぱAのように、心に私の言葉が入つていかなかつたなつていう反省が私にはありました。毎日トラブルがある中で、このみいちゃんは感受性が本当に強いんだなあつて、私の中で思つて、まずは、そのみいちゃんの強い思ひを、話をじっくり聞くことにしました。友達とのやりとりとかもお互い涙を流しながらとかなんですけども、言ひたいことがあるなら全部出せばいいと思つて、ずっとやりとりを見守ることをしました。お互いに落ち着いて話したいことを話して、落ち着いたところを待つて、それで互ひの気持ちを整理をした上で、「この時はこんな言ひ方もあつたんじゃないかな」とか「この時はこうするとよかつたよね」つていうふうになつて伝えるようにしてきました。それを毎日毎回繰り返してたんなんですけど、2学期になつて、それこそ最近なんですけども、一学期もそういうトラブルがあつて落ち込むともう、しゃがみこんで泣いたりとか、隅の方で体育座りになつて泣いてたりしたんですけど、こうだつたよねつて誤解を解いてあげたりすると、ぱつと様子が変わつて、顔の表情も変わつて、「なんだそういうことだつたのか、ごめん、ごめん」つていうふうになつて、みいちゃんが切り替えが早くなつたんです。そういう姿を最近見た時に、あつたかなあつて今までやってきたことが、すつとはまったよな感じがして、私も成長を感じて、うれしいなと思ひました。

先ほど聞けなかつたんですけど、昨年度から3年保育になつたということで、どういふ経緯で3年保育になつたのか。

園長 市の幼稚園がずっと2年保育で来てたんですけど、園児数の減少とともに子どもたちに適正な規模で、一応20人、4歳だつたら20人ぐらいの規模に、うちの幼稚園10人前後だつたので、そういうことも含めて、市の方で、子どもたちによりよい教育環境をということで、地域とか保護

者のニーズもあり、市の要望もありましたので、3年保育というのをやっとなら去年から容認してもらうことができました。

現担任 今、5歳児になりまして、Aを担当しています。私が3歳児の担任をしてる時からAとも関わりをもっていましたし、それなりに私のこともAは知っているというところから始まったので、報告者との関係も結びながら、一緒にAを見てこられたかなと思っています。今も、トラブルって言うことは少なくなってきましたけれども、やっぱり自分の思いが言えない時に少し暗い表情になる時もあるんですが、その時はやっぱり表情もすごく豊かなので、すごく思っていることも分かるなと思うので、その時は、そばに行って「どうしたの？」って聞くと、「こうだったの」みたいなことをお話してくれたりするので、その時には、一緒にどうしたらよかったか考えたりとか、その子が安心して、周りの子もその子の思いを感じながらいけるといいなあっていうふうに思っています。今は、周りの子も少しずつAの気持ちを受け止めながら、「こうしたらよかったんじゃないの？」とか「こういうふうにしたらどう？」って言うので、Aも、こうしたらいいんだなあっていうふうに思いながら過ごしていますし、Aも元から友達のことをすごく好きだし、下の人のこともすごく好きなので、すごく今、良さを発揮してくれているのかなあと思いながら保育にあたらせてもらっています。

—報告5—①

つながりは力となって～Aさんとの出会いの中で～
(徳島県人教)

—主な質疑と意見—

石川 ①Aは、地域の小学校の普通学級に在籍なのか、特別支援学級なのか②小学校でこんなふうな生活をなさっているのか。

奈良 小学校です。特別支援の今児童がいて、身体のこともあるんで、みんなと同じにはできない。でも母親の願いもあって、うちの小学校へ入ってきた児童がいます。母親としての望み、願いがあって、特別支援の担当としては、その子に今合ったことをさせていくという中で、保護者と思いのずれというのがあります。報告の中にも、療育に専念させたいという先生の思いと、そうじゃないという母親のずれをどう調整していったらいいの。最終的には、私たちが、保護者の願いを聞き入れてと思うんですけど、いったんずれてしまった親との関係を良い形に戻してこられたという、そのあたりの苦労話から勉強させていただきたいなと思います。

報告者 Aは、今現在、隣の地元の小学校の特別支援学級の病弱クラスに在籍しています。1年生との交流学級で、1年生の教室の方にも通っています。Aが入学するにあたって、4月に家庭訪問で、お母さんの願いを聞いた時、職員室で、Aが、みんなで地元の小学校に行くためにどういうふ

うにしていったらいいか話し合い、その思いを小学校にも伝え、教育委員会にお話をもっていただきました。小学校では、Aのためにどうしたらいいのだろうかとすごく相談をさせていただいて、今病弱クラス開設ということで、元気に通っております。先日、学習発表会があり、私も見にいかせていただきました。Aは、1年生のまず一番初めに発表があったんですが、「これから1年生の学習発表会を始めます」と元気に体育館の後ろの方にいた私こところまで大きな声が聞こえました。元気に友達と一緒に「くじらぐも」の劇の発表をしていました。私の隣にいた地域のおじいちゃん、おばあちゃんが、「あっ、あれはAさんの子やな」っていう、隣の地域の方がすごく温かい雰囲気の中でAのことを言ってくれているのが私もとてもうれしかったです。Aの担任と話す機会もあり、Aの様子を聞いてみると、周りの友達が、幼稚園からのつながりって大きいですねって言うので、とても心に私に響いています。Aの特性っていうのを周りの子が理解して、今は声をかけていい時か、今はそっと見守ってあげていい時か、そういうのが分かっている友達が周りにいます。Aが思わず給食のエプロンを振り回していたのが、隣の小学校の男の子に当たったんですが、その男の子が、「Aさんわざとじゃないからいいよ」っていうふうなかたちで言ってくれたみたいです。先生は、「ありがとう。わざとじゃないけど、Aさん、当たったことをちゃんと言うとかね」と言ったら、「あっ、いいよ」って、周りの子もそんな関係で今過ごしているのです。さらに今日、会場に小学校の校長先生がおいでくださっているので、お話をいただきます。

徳島 (校長) 今、報告者が言った小学校での様子なんですけれども、まず最初に保護者の願いでもある地域の学校で学ばせたいというお話を受けて、昨年度、校内支援委員会、町の教育支援委員会を経て、町当局の支援としまして特別支援学級、病弱学級を4月からの開設に向けて動き始めました。併せて加配要望ということで、2018年度特別支援学級をスタートさせました。学校での様子なんですけれども、一端でございますが、個別のカリキュラムというお話が文章の中にもございましたが、国語、算数、書写、道徳などは支援学級で実施しております。また、本校は支援学級3クラスございますので、週一回は、支援学級の子もたちと合同学級を進めております。細かいところでございますが、国語につきましては、指先の動きが不自由、手が不自由だっというところもございますので、保護者の方、将来的に自立をしてほしいという保護者の方の願いもございまして、国語などは、自分の名前が書ける、それからひらがなの読みを中心に学習を進めるということで、合理的な配慮にはつながるかどうかっていうところはございますが、今いろいろなソフトがございまして、タブレット端末等使って、

指の動きをひらがな文字をなぞりながら学習を進める場面もございます。算数につきましては、数の理解を中心に実施しております。生活、体育などは、子どもたち幼稚園から一緒に学んできた子どもたちと、体育、図工、学活等を進めています。報告の中にもありましたが、大きな手術をしておりますので、その時の体調、体力を考慮して対応を図っています。また歩く体験っていうのもAにとっては大変必要なことでございますので、生活科などは、野菜の植え付け、少々重い鉢なども自分で持って歩く訓練につながっているところもあります。これからも地域に育っていく将来のためにも、少々内容が難しくても、共に育った仲間がいますので、1年生の教室で学習を進めています。生活につきましては、報告にもありましたが、将来の自立ということも考慮して、排泄の自立とか、ボタンをかけるっていう技能面なども併せて実施しております。周りを中心にAが育つ、Aを中心にAも周りと共に育っていくということで、小学校でも学習を進めております。また、基礎的環境整備につきましては、安全面ということ報告もありましたが、ドアの開閉とか、手洗いとかトイレとかですね、そのあたりも出発、4月の開設までに町当局に要望いたしまして、安全で気持ち良く学校生活が、小学校生活が送れるように、保護者の方、それから幼稚園の先生方と共に話し合いを進めながら前に進んでいます。

報告者 お母さんと、お迎えの時に話す機会がありました。お母さんの家でしていること、Aに対してしていることを、私は、しっかり聞くことを怠っていたと思います。ある日、うちの園長が、「お母さんの家でのやり方、教えてもらえたら、一番私どももそれ真似してさせてもらえたらいいんやけどなあ」って声をかけてくださったんです。そしたらお母さんがパッと笑顔になりました。その瞬間、あっ私は、今まで自分の考えだけに、自分の考えが正しいと思って、それをお母さんに押し付けていたんでないかなって、その瞬間思いました。お母さんのいいところ、それからお母さん自身もしっかり話をしていこうと思いました。表現会の練習のある日、Aが、おうちで藍畑幼稚園の歌を歌っているというのを聞きました。それにあわせてお母さんがピアノを家で弾いてくれたようです。「ピアノを弾いて一緒に歌って、楽しかったな、先生」って言ってくれた時に、「あっ、お母さん、ピアノ、すごくお母さん上手だった」って言うのを、お母さんのことを聞いていますって言うと、お母さんも、すごくニコリされて、「また先生、表現会に向けて家で練習するわな。Aがしっかり歌えるように、家でも頑張るわな」って言うてくれるようになりました。私自身、お母さんに寄り添うということが自分ではできていなかったけれど、周りの園長、それから、この文章にも出てきますが、C先生にも教わることでありました。自分のことをしっかり語るC先生

は、自分の子育ての仕方とか、そういうふうなものをAのお母さんにも伝えたりしていた姿を見て、あっ自分のことを語る、私にはそれができていなかったな。もっと自分の経験、自分が困っていたことをお母さんに、もっとどんどん自分の思いをぶつけていったらいいんだっていうのを感じたのを覚えています。

熊本 今、先生の話とかいろいろ聞いていて、自分の感じていることを語ります。先ほど、やっぱりお母さんは語りたことはたくさんあった、そのことに気づくことによって先生の考えも変わり、対応も変わって行って、共に一緒にAのことを、どういうふうにしていけばいいのかなっていうふうに変えられたということですけども、やはり、自分のことを語っていくというのは、すごく大切なあっていうのを私も実感しております。うちの小学校、低学年から自分を語っていくということを大切に人権学習を進めております。低学年なんかはいいんですよ。自分のことを話したくてしかたがない子もいます。まあそれはあの明るく話せる内容だったりするんですけども、その前に担任である私たちもいろいろ語っていきます。特に高学年の担任になった時は、私はあの、高校時代の友達のこと、自分の中だいたい昔のことだから整理できているはずと思っていたんですけど、いざ子どもたちの目の前で話そうとすると全然話せなかったっていう思いがありました。けれどもやっぱりそれを聞いた子どもたちから返しをもらう。なんか、そこで、思いのやりとりがあったんだなっていうことを実感しました。ただ今、自分の学校現場におりまして、親御さんとの間で、なかなかですね、こっちが思っているようなこと、なあんでそこに気づいてくれないのかなあっていうこと、ああ日々感じているなあっていうのを今思ったんですよ。子どもたちと授業する時は、なんかそういうふうにはやっていけるのに、親御さんとの時も結局親御さんたちも語れる人と思っている、そうやって一緒に子どもを良い方向へと向いていけるように、そんなふうにも自分もなりたいたっていうことを改めて気づくことができました。

—報告6—⑭

「話して良かった」

(石川県同教)

—主な質疑と意見—

兵庫 今年3年目です。になって、1年目で4年生の担任をして、2年目は2年生の担任をしたというのもあって、先生の話を知りたいなと思って今回この分散会に参加しました。質問ですけども、①現在のAとBの様子について。②Bについては学力面でも少し苦しいところがあったということで、そのBへの今の支援のあり方、変化とかもし何かありましたら。

報告者 Aは3年生になってからも不登校気味に何度かっていると聞いています。おうちの状況の変化について今の担任に聞きました。お母さ

んは仕事が去年よりも忙しくなっているそうです。やっぱりおうちの状況がすごく彼の精神状態に大きな影響を及ぼしてるんだなあっていうのを改めて感じました。でも、一学期、学級会長になったという話を聞き、それも、何人か立候補した中で、子どもたちの投票でAに決まったというふうに聞きました。なので、やっぱり周りの子からの信頼っていうものがすごく、不登校気味ではあるんですが、すごく信頼が厚いなっていうのを改めて感じました。多分彼にとっても、私がたまたま廊下ですれ違った時に、「会長になったんやってすごいね」という話をした時に、「う～ん、でも最近、時々また僕学校休んだら。でも頑張らんなんねん」というふうに言っていて、その彼の様子を見て、おうちの状況で不登校気味になったりはしているんですが、やっぱり周りの子がそうやって受け止めてくれた経験があったりとか、今のクラスの子どもたちが今でもこうやって自分を信頼してくれてるっていうことが、彼の中では自信になってるのかなと思うんで、この私が去年おこなったことも一つ彼の中で強味になってくれてたらうれしいなと思います。

Bくんについては、今も支援員さんは、ついていきます。やっぱり学習、落ち着きとか、みんなと同じ姿勢で座ってということは、今でも難しいし、落ち着きはあんまりないんですが、でも、彼自身もすごく吸収力のあるお子さんなので、成長をすごく見てて分かるっていうのは、自分ですごくノートを書くのが苦手だったんですが、自分のできるところは自分で書こうって自分の中で判断して、ちゃんと考えて、ここはちょっとあまりにも長いから、ちょっと書けないなあ、支援員さんにちょっと頼もうかなとか、ここは自分でも書けるから自分で書くわ、とか自分で考えながらやっているっていう話をこないだ聞いて、そうやって考えられる、自分で自分のできること、できないことを考えられるっていうのは、彼にとってやっぱり強味なのかなっていうふうにお話を聞いて感じました。

三重 レポートを聞いて、本当に先生の家庭にどんどん関わっていく姿勢が、お母さんの気持ちも変えた部分もあったんじゃないかなと思います。その中で、Aが作文を読むことができ、その後、振り返りに、私もお父さんとお母さんが離婚しちゃってっていうことを書いたということで質問ですが、①この子とこの後どんな話をしたのか、その子の親ともどんな話をしたの②その子との仲というか、その後の深まりみたいなものもあったのか。

報告者 この子は、すごく普段は明るく接していて、全然こんなことも微塵も感じさせないような活発な女の子なんですけど、こんなふう書いていて、これに対して、じゃあ後からその子呼んで話を聞くみたいなそんなことはしていません。ここに自分の本音を書けたって言うて、私はそこ

からさらに追求したりはしていません。ただ、やっぱりおうちの方がこんなふうに思っているっていうことは知りたいかなと思ったので、懇談の時に、その振り返り用紙をとっておいて、その振り返りに実はこの間こんなふう書いてたんですっていうふうにして、お母さんには見せました。そしたらお母さんは、やっぱり家でも時々さみしいんだろうなっていうような様子がやっぱりあって、やっぱりここでもこんなふう書くんですねって確認したような感じでした。Aとこの子の関わりとしては、同じ悩みがあるとお互いに分かったとは思いますが、別にその、2年生ということもあり、そのことについて二人で会話するような、そんな場面は見なかったかなと思います。

兵庫 私は今6年生を担当をしているんですけども、ちょっと最初に締めすぎて、子どもたちが悩みを話してくれないという状態になっておりまして、どうにかしたいなあって思っていたところで、このレポート聞かせていただいて、胸を締め付けられる思いがしました。ちょっとお聞きしたいことなんですけども、先生が子どもたちの不安を聞けるようになったところに、先生が自分自身の不安などを話したっていうところは大きいと思うんですけども、多分それ以外にもここまです子どもたちが先生に悩みを話せるっていうところは、普段の先生の子どもたちへの接し方で、いろいろな何か支援があるんじゃないかなと思って聞いていました。多分無意識でやっているところも多いと思うんですけども、先生自身で普段の関わり方が、何か子どもたちが話しやすくなるものにつながっているんじゃないかなって思うところを聞かせてください。

報告者 意識してやっていることはそんなにありません。今振り返ってみて、大切だと感じているのは、私自身があまり上から先生っぽくいくのがうまくなくて、わりと子どもと同じような目線だったりとか、子どもと一緒に学んでいくという感じなので、その姿勢がもしかしたら、この2年生のこの子たちとは合ってたのかもしれないなっていうこととか、一学期から子どもたちが、例えば生活科で、こんな町探検をしたい、地域のこんなこと調べてみたいっていうのをすごく大事にして、子どもたちの意識の中で学びを進めていくことが多かったりしたこととか、子どもたちを生き生きさせていたかなって思います。それから、子どもと会話、対話を増やすためにも、2年生ということもあって、毎日読み聞かせをしたりとか、そういう子どもとのやりとり、全体とのやりとりっていうのがすごく多かったっていうのがあるのかなあって思います。

三重 このAの暮らしが出ている作文から、周りの子たちの暮らしが見えてくる。「僕の親も離婚しちゃって」というところがとても心に残りました。先生の話の中で、ちょっと自分の話と重なるなっていうところがあって、それは、こう先生が、自

分の話子どもたちにしていく場面、僕自身も、その自分の話をしていくことの大切さみたいなのに気づいたことがあって、で、それがこう、僕のクラスには、一人親の子が何人かいるんですけど、自分も生い立ちの中で、母子家庭で育ってきて、そのことを子どもたちに話していったことがあります。その中で、「先生と一緒にや」とか「似とる」というような声がでてきたりとか、僕が知らなかった子どもの思いみたいなのを聞けたっていうのがあって、自分の話をしていくことはすごく大切なことやあって、自分の中で改めて感じました。あと先生が、これからお父さんと向き合っていくって言うことを言っていたと思うんですけど、自分自身も、母子家庭に育っているんで、お父さんと向き合って、でその向き合ったことをきっかけに、また子どもたちに話していきないうって今日思いました。

三重 3年ぐらいの経験の報告者が、一生懸命学級の中の気になる子とか、しんどい子に、一生懸命関わる姿とか、とことん関わる姿に、とても心が打たれました。もう、うちの同僚も連れて来たら良かったなとずっと後悔しています。自己開示というのは本当に大変な作業だったと思うんですけども、子どもをつなげようとか、本音を出させようとか、保護者とつながろうとか、そんな思いを一生懸命考えていく中で、きっとこのことが一番大事やなと思われたのかなと思います。5年生とか6年生とか中学校とかで、こうやってこう自分のこと話して、子どもらをつなぐっていう取組多いんですけども、2年生の子どもたちに、というのはあまりなかったかなと思います。

2日目の総括討論B

福岡 報告者の皆さん、素敵な報告を昨日今日と、どうもありがとうございます。今まで関わってきた子どもたちのことを自分思い起こしながら報告を聞かせていただきました。私の方からは、連携に関わる場所のお話をさせてください。

新一年生が入学してくる時に、就学時健康診断というのがあってんですけども、就学時健康診断に連絡がとれなかった、どこにいるのか分からなかったお子さんが、実は、自分らの私が今いる学校の校区のお姉さんの所に住んでいるということが分かり、スクール・ソーシャル・ワーカー (SSW) もその段階から入りながら、かなり支援が必要になってくるだろうということで、入学前の引継ぎがありました。ま当然未就学、未就園、どこの保育園にも幼稚園にも行っていない状態で上がってきますというところを聞いていたので、入学の段階から手厚くその子に関わっていかないといけないなというところを予想を立てながら、小学校でもその子を迎えていきました。スタートしてみると、やっぱり集団生活になかなか馴染めない、朝登校時間までに登校ができない、初めてのことだらけの1年生の生活に戸惑いと不安があるっていう様子が見られました。入門期は、他にも

様々な支援が必要なお子さんたちがいるので、担任の先生以外に、もう一人複数体制で子どもたちの学習とか生活の指導にあたっていているんですけども、そこでその子も当然対応しながら少しずついろんなことに慣れてきました。最初は、極端な話、絵を描くこともできませんでしたが、しかし、何もないフラットな状況で入ってきているので、鉛筆の持ち方を教えると、すんなりずっと正しい持ち方にいけて、くせもなくきちんとした鉛筆の持ち方でスタートできる。それから、できるようになる喜びがとても大きい。一つできるたびに笑顔がものすごく光っている。自分ができることとか、次々と増えていくと、また次にチャレンジしてみようっていう気持ちにもなっていていました。けどやっぱり不安がつきものだったので、1年生中心に養護教諭も支援に関わりながらずっと支えてきました。物の準備とか、どうやらお母さんの方も、なんらか支援がやっぱり必要じゃないかと感じられて、もう一度家庭調査票見直してみたら、未就学と書かれていました。お母さんは、そこの保育園幼稚園を出た欄に、中学校区の、同じ中学校区の中にある保育園の名前を書いていました。ただ期間が1、2歳児っていう本当にちっちゃい間の期間だったんですけども、そこにほんの少しでも書いていたことが分かったので、早速その保育園に行って、状況を聞きました。そしたらやっぱりお母さんにも個別な声かけとか、細かい関わりというのが必要だということをお母さん自身も、その保育園の卒園生だったことが分かって、お母さんも実はかなり厳しい生活の背景の中で育っていったということも分かってきました。その入学してきた男の子の下に妹がいるんですけども、妹がやっぱりどこにも行っていない状況っていうことを同時に保育園の先生の方に今度伝えると、「ぜひうちの保育園においでってお母さんに言ってあげてください」と声をかけてくださいました。それだけ厳しい背景の家庭で育ったお母さんだし、かなり支援もしながらということが必要なのに、「なんでそうやって来てくださいますってすぐに言ってくれるんですか？」と尋ねたら、「お母さんが知っている保育士が、まだたくさんいるので、お母さんもきっと安心できるだろう。お母さん自身が人との関係をつくっていったり、自分の困っていることを言うことが難しいところがあるので、少しでもお母さんのことを分かっている職員がいるところだと、お母さんが安心できると思うから、ぜひ勧めてください」というふうに言っていただきました。それを聞いてとても私たちも心強く、で、学校と保育園の方で連携を取りながらの、その家庭の支援みたいところがまた再スタートしていきなうって。その子がやっぱりあまりにも朝遅れてくるので、なんかこう時計も読みきらんのか

ねとかいう職員間のつぶやきが出て、いやいやでも1年生、何時と何時半は習ったから読めるんじゃないって言ったところに、おうちに家庭訪問に朝いつも迎えに行くと、荷物ががらんどうで何にもないようなところなので、もしかしたらということで時計がないということに発想がいて、聞いてみたら時計がないんです。今時なんかスマホで時間を見る人が多くって、社会人の中にも時計を持たない人が増えているっていうのもあったんですけど。そのうちに時計がないということが分かったので、学校にある時計を持って行ってあげて、「見ながら来ていいよ」と言うと、すごいなんかその子も張り切って、朝、その2、3日は頑張って時間に間に合うように来ていました。意外と当たり前と思ってることが当たり前じゃないことって、とってもあるなということをそこで学びました。学校は学校でできる、登校時の送り迎えとか、個別指導とか、入り込み指導とか、複数教員の声かけとか、学校にできることを最大限やりながら、SSW、保育園とも協力しながら支援していています。

もう一つ発言させてもらおうと思っていたのが、外国にルーツをもつお子さんや、外国から引っ越してきたお子さんで、やはり1年生の初め頃転入してきた子どもだったんですけど今3年生になってます。子どもは意外とどンドン輪の中に飛び込んでいって、1年生だったので、ひらがなも他の子たちの中にもなかなか難しい子もいて、一緒に頑張っていけば、なんとか楽しく学校生活を過ごせていたんです。しかし、お母さんがやはりとても不安で、お母さんも日本語がほとんど話せない、分からない状況だったので、担任の先生ともコミュニケーションをとってたんですけど、誰もうちに遊びに来てくれなかったり、お母さんも声かけてもらえない、不安でさびしいということを担任の先生に打ち明けられました。担任の先生は、先生としての支援をしつつ、ふと思いついたのがPTA活動です。PTAのいろいろな親子行事みたいなのがけっこうたくさんあるんですけど、それを丁寧に説明してチャレンジしてみたらってことで働きかけて、そのPTA行事にその親子がどンドン参加していくことで、お母さんが学年の壁を越えて、いろんなお母さんたちとのつながりができて、安心感をもていったというところもありました。だから、ケースに応じて、いろんな大人がつながりながら、子どもやその背景にある家庭の支援体制づくりをしていくためには、その子どもの背景とか困り感をしっかりやっぱ見とることがまずは大事だなと思います。そのニーズに合う様々なところとのつながりを、つながった者同士がそれぞれできることを最大限に取り組んでいくことって、とってもいいのかなって思っています。それと同時に、強味を活かすっていうか、この子が学校に行っていないことが一見とってもマイナスなんですけど、でも逆にそこを強

味にしていけたことってとってもたくさんあるので、その子やそのおうちがもつ強味に目をつけながら、いろいろなところとの関わりを持ちながら支援してきたいなっというふうに今思っています。

大阪 私は4年生の担任をしていて、4月の3週目ぐらいに中国から来た中国籍の児童もっているんですけども、今、先ほどおっしゃられていたのは、PTAとつないだりとかってところで、やっぱりあの同じような悩みを抱えていて、子どもはコミュニティーに入っていくことができるけれども、大人はやっぱりなかなかコミュニティーに入ることができないっていうところで、少し悩みを抱えていたんです。そこで自分がしたのは、地域に識字学級というものがあまして、その識字学級に週2回通ってはどうかということをお勧めしたことと、あともう一つ、以前、もう一人中国籍の子いるんですけども、その家庭同士、子ども同士をつなぐことで、遊びに行ったりとかのつながりから少しずつ今、保護者のコミュニティーというところが広がっていったかなあって実感しているところです。やっぱり言葉の壁ってすごく大きくなっていうふうに自分も感じていて、日本で永住することを目標にしている家庭で、必ずその子どもだけじゃなくって保護者も言葉を習得していかなければいけないっていう中で、学校のできることの範囲ってすごく限られているなあと感じる中で、地域のつながりというところを強味にしながら頑張っていけたらなあって、今日の報告聞いて思いました。

報告者 あのう保育園は、保育園保育要録というもの一人ひとりに書いて小学校に引き継ぎしています。愛媛県その他のところもおそらくしていると思いますが、担任は一生懸命何十時間もかけて書いています。私も一緒にそうだったよねえとか言いながら書いています。それで、もちろん口頭での引き継ぎもしています。いろんな小学校から先生が来てくださったり、電話であったり、「このお子さん、どういうお子さんですかあ」って。それで口頭でももちろん言うんですけども、その保育要録一生懸命書いて、先生方、小学校の先生方、読む時間本当にあるのかなあという、私長年そろそろ10年ぐらい要録書き続けているんですが、その要録の内容であるとか、本当に知りたいことっていうのは本当は何なのかなと、難しい問題なんですけど、いつも「読んでいただいたか」って、「ちゃんと読んでますよ」っていう先生もたくさんいらっしゃるんです、実際に。だけであの早い話、100人120人の子どもがいる小学校の先生がおっしゃったのに、4月はたまに見てなくてねって。で、引き継ぎ、4月に幼小の関連のお話し合いがある時に、それまでに必死で読んでますってことおっしゃったので、4月まだなかなかその子のことを分かってもらえてはいないんじゃないかなあって、そのことを思いながら、

ちょっと厳しいような言い方なんですけど、要録に対するご意見、ちょっと聞いてみたいと思います。

福岡 私は今、児童支援の立場で、保育所とか幼稚園と小学校をつなぐということが自分の仕事の一つになってますので、私は目を通しながらつないでいくようにというところをやってるんですけども、一応ですね、保育園、保育所、幼稚園からいただいた保育要録には、目を通すようにしています。あと、うちの学校は、2月にですね、あのう、入学してくる子どもたちの個別の連絡会っていうのを、上がってくる保育園、幼稚園の先生方と小学校との話し合いの中で、個別連絡会っていうのをもつようにしています。日程を設定して、小学校の方に来ていただくんですけど、来れなかったところは、小学校の方で各園を回りながら、子どもたちの様子を見たりとか、それから子どもたちの情報を集めて、少しでも段差というもの、子どもたちにとって抵抗感のないものにしていくこととか、それから不安を取り除くようにしているところで配慮するようにしています。また、入学してきたら、5月には授業参観をして、保育園、幼稚園の先生に集まっていたき、その後、個別の情報交流っていうことをですね、していくようにしてるところです。それから、昨日ですね、不登校の子どもが報告されましたが、私が3年生の時受け持ってた子どもなんですけど、4年生になって不登校になって、本当にすごくちっちゃなこだわりが積み重なって、不登校になっていったと思うんですけども、親御さんとも話し合いながら、支援室登校っていう方法をとりました。その子が学校にいないことを当たり前にしたらいけないっていうことですね。その支援室に行ってることと、それからその子どもとそれから学級をどうつないでいくかということ、児童支援の立場から、担任といろいろ話し合いながら進めていきました。その子が1学期には教室に入れずに、2学期から教室に入れるようになっていったんです。その時にその子と学級の子どもたちとの約束っていうのができていました。昨日、不登校の子どもが学級に来た時に、皆で声をかけ合って、「よく来たねえ」とか、拍手で迎えるとかいう話も出たんですけども、その子にとっての登校してきたことを特別にしてほしくないっていうような希望があって、とにかく自然な形で、「あっ来たったん」みたいな感じで迎えていくこととか、その子が何をしてたか、休んでた時に何をしてたかっていうことは絶対に聞かないようにしようというような約束。その代わりに、自分たちが、その子が教室にいなかった時に、自分たちはどんなことをしたよって、そういうことは伝えていこうとか、そういう細かい約束のもとで、その子を迎え、その子がまたその学級の中で居場所をつくっていったっていうことがありました。だからやっぱりいろいろ子どもたちの思いとか、願

いとか、また保護者もそうですけれども、違うので、そこをしっかりと見つめていかなきゃいけないし、私たちもそのところ話し合いながら進めていかなきゃいけないなということを感じているところです。

石川 私は、子ども同士のつながりについて、ちょっとお話していいですか。今あのう不登校の子どもたちとクラスの子とクラスの子のつながりっていうお話もあったんですけども、盛先生のレポートで、あのう特別支援学校で体験学習にAが行った時に、「Aさんが全然喜ばなかった」って、お母さんはおっしゃった。で、えっと、お母さん自身も地域の学校で学ばせたいと思っていて、結局このA自身も、やっぱりそこには自分の同じクラスの子どもたちがいないっていうことはもう直感的に多分分かった。分かっていて、僕のいる所はここじゃないんだっていうのを多分分かったんじゃないのかなあと。私、あの小学校で仕事していて、1年生の担任をした時に、保育園とか幼稚園とか、ここまで子どもたちが育っているのかというの、すごいびっくりすることがいっぱいあるんです。あんなちっちゃい子が自分のことしか、自分のことで精一杯だろうって思っていました。なのにちょっと困ってる子に声かけたり、「一緒にやろう」と言ったり、なんか自分が悪いなと思ったら「ごめんなさい」って素直に謝ったり、本当に保育園とか幼稚園って、今日のレポートあの聞かせていただいて、ここまで友達関係とかができていくんやな、そういうことを幼稚園、保育園の先生がすごい大事にしておいでるんやなっていうのを改めて感じました。だからその中でやっぱりA自身が、友達と一緒にすることの楽しさとかをやっぱり学んで、もう実感として分かっているから、こういう姿になったのかなあと。でも石川県では、特別支援教育が始まってから、大変特別支援学級在籍の子どもたちや特別支援学校に進む子どもたちが大変増えています。『共生・共学』って言うおきながらどうしてそういう分ける方向へ流れているのかなっていうのは、いつも「う～ん」と思うところなんです。でもやっぱり子どもたちは一緒に学びたいと思っているし、保護者もできたら一緒に地域の学校で育ってほしいと思ってる。子どもが病弱だったり、知的な遅れがあれば勉強についていけないのか、情緒不安のお子さんだったら学校に迷惑かけるんじゃないかとか、周りからどう思われるんじゃないかとか、やっぱりそんな不安がある中で、「分ける」方へ選ばせてしまっている。私はみんな一緒にやっていけたらいいと思っています。だから、本当に現状が子どもにとって最善の方法なのかっていうことは私は決して言えません。この子は個別に勉強した方が絶対伸びるから支援学校、支援学級とか支援学校へ。就学、就職のために支援学校で訓練した方がいいよとか、そんなことは絶対に言えない。おうちの人やその子の思いを大事

にしたいなあって思っている。やっぱり子どもたちのつながりだと思うんです。なんでこんなことを言うのかというと、私は特別支援学級の担任をしてるんですけども、去年6年生の女の子がいて、中学校に進学しました。小学校からずっと特別支援学級に在籍をしていて、自閉的なこだわりが強いお子さんで、小さい時はパニックになったりしていて、お父さんお母さんが、この子は支援学級じゃなきゃ絶対に無理や、一人で落ち着く場所が必要だからってということで、その子の意思は聞かずに小学校の支援学級に在籍させました。ところがその子は、どうして私だけがみんなと違う所にいるんやっていうことをずうっと思っていました。私は6年生だけ担任をしたんですけども、その子はもうとにかくみんなと一緒にやりたいんだと、だけど自分にはできないところがあるんだと。だけど、でもやりたいんやって、でもできないことがあって、私はどうしようってすごく迷っていて、その時に私は、できなくてもいいんじゃないかと、あなたはまあ数とちよつとできないけども、人間誰でもできないことがあるんだから、できないならできないでそれは仕方がない、でもみんなと一緒に中学校行きたいんなら、できないところばかり目を向けなくて、一緒にできることを友達とやっつけていけばいいんじゃないかっていう話をしました。お母さんは、この子は絶対に無理やって、そんな普通学級でやっつけていけるはずがないって言っていたんです。でも、本人の強い意志と希望、そして、ずっとかかっていた病院の先生にも相談したら、まあ本人が一番その方がいいと思うならそうしてみたらどうだというようなアドバイスがあったようで、今は地域の中学校の普通学級で、なんかいろいろありそうなんですけども、友達と楽しくやっつけているというふうに聞いています。子どもたちとつながりをつくっていくのはやっぱり自分たちの仕事だなあと思うんですけど、子どもの力を信じて、その子自身や周りの友達とのつながりを大切にしたいと思っています。

滋賀 私も昨日からずうっとそのことを考えて参加をしております。えっと6本のレポートの中心になる子どもたちは、本当に排除されずに丁寧に、怒っても、うまくいかなくても、その集団から切り離されることなく、報告にあるような育ちをされていることを、とてもいいなあって思って聞かせてもらっています。私は特別支援学校で、子どもたちに特別な教育をしているわけですけども、よく保護者の方から「先生、こっちの学校選んでよかったわ」って言われます。でも、あまりうれしくはありません。本当それは、地域の学校を選びたかった気持ちがあるから、そんな言葉が出るんだろうなって思うからです。地域の学校、小学校、中学校、そして高校、選べない、選べない理由は一人ひとり違うと思うんですが、そこで、あの昨日今日の発表にも、「ここの保育園

に行けるでしょうか」ってとっても悩まれる保護者の姿、こんなに悩まない保育園の門を叩けない、その障害がある子どもを育てておられる保護者の気持ちを考えると、大多数の保護者は、あまりそこまで悩まず、当たり前前に小学校の門を叩きます。そこに私は大きな差別があるんじゃないかなあって思っています。今、違う学校もあるので、選ぶ、選ばない、保護者の願い、本人の思いはさぶん大切にされるようになりましたが、大きなマジョリティの教育体制がなかなか変革しない中で、ハンディのある子どもたちが、地域の学校を普通学級を選びたくても選べないのも事実だと思っています。私は支援校にいますが、この子たちが地域でいろんな人と一緒に生きていける、周りの人を信頼して安心して生きていけるようにと思いながら、とても自分自身支援校の中の、とても狭い中で実践しかできていません。ただ、障害がある当事者と知り合い、であいの中で、すごい苦しい思いをして養護学校に通ったという耳の痛い話を、自分自身しんどい思いをする話を、友達から聞かせてもらうことができた中で、地域を選んでもいい、普通学級を選びたいという保護者の方や当事者の子どもたちと、少しでもつながれたらと思って、『共生・共育の会』などをつくりながら話をしています。ここで発表された先生のこの周りの方、保護者の方、当事者の方もおられるかもしれません。私がであった方は、みんな普通に選ぶのにとっても苦労されています。これでいいんだろうか、地域の学校選びたいって言ったけど、そっちよりも支援校の方がいいよと言われて、こっちがいいんだろう。でもやっぱり今となってそこにいないということは、先ほど前半の中で暮らしを共有する仲間づくりっていう同和教育がしてきたことが挙げられてきたと思います。暮らしを共有できなくなるんです。その子のためだけけども、本当に支援校の私たちも一生懸命させてはもらいますが、暮らしを共有できないこと、悩みを打ち明ける相手が少ないこと、地域の中に少ないこと、それが差別を生む一つの原因ではないかなと思っています。今、支援校の生徒たち一生懸命通ってきてくれているので、社会に出る時、一人でもたくさんの人とつながっていけるように、その子たちにも力をつけたいと思っていますが、もっと町に出て、周りの小学校、中学校、高校、同世代の人とどうつながっていくんか、つながる場が本当にできていないなあとは思っています。今日聞かせていただいた中で、また一步職場に帰って、町に出ることの意味とか、どういう方法があるかとか、実践につなげていきたいなと思っています。

大阪 浪速区の3つの中学校と校区の小学校で、「浪速子ども人権文化祭」という取組を20年ぐらい前からやっています。保育所、幼稚園の子どもたち、それから小学校、中学校の子どもたち、支援学校の子どもたちが、なんらかの形で参加を

して、幼稚園、保育所の子どもたちやったら、小学校、こんな兄ちゃん姉ちゃんおるんやということで、まあ年間3回ぐらい、集まって取組をしてるんですけど、主には、一回目が難波中学校で、体育大会の時に、小学校の多くの子どもたちに来てもらって、一緒に走ったりっていうふうなことやってます。それから文化発表会の時には、保育所、幼稚園の子どもたち、小学生の子どもたち、中学校の保護者の方もみんな集まってもらって、この10何年間の育ちっていうか、そういうのをお互いに確認して、ああすごいなあ、こういうふうな私も小学生の時とか中学校の子に聞いたら、中学校の子に聞いたら「私こんな、一生懸命大声で歌ってたんかなあ」とか、自分の育ちを客観的に見つめ直したりっていうふうなことがあります。保護者の方も20年前、「私も実際ここで、難波中の舞台上で歌わしてもらってたんやとか、あるいはリコーダーを合奏してたんや」とかいうふうな形で、保護者と子どもたちとがつながって、そういうふうな関係とか、それぞれの小学校、中学校、保育所、幼稚園、支援学校の先生方も来ていただくんで、先生方と子ども同士のつながり、いろんなつながりがミックスした状態で、自分たちのそれぞれの段階から次のステップに向けてどういう選択をしようかなっていうことについて、子ども自身も、あの中学校へ行きたい、あの小学校へ行きたいとか、保護者も、こんな兄ちゃん姉ちゃんおるんやねえ、そしたら考えてみようとか、ちょっとした判断材料になってもらえたら、地域で一緒に学んでいくっていうことの参考になるんじゃないかと思ってます。そういう取組を学校を超えて、地域の中でやっています。

石川 今日は、6本目の報告者と同じ勤務校なので、応援に来ました。今その特別支援学校に行かれてるお子さんとか、それとか通常学級の子どもの方がちょっと変わらない話とかすごく聞いて、僕、考えてきたんですけど、僕は小学校のいわゆる通常学級の担任をしていて、じゃあ何を大事にして学級経営していったらいいのかなってすごく考えています。さっき同じ県同教の方が話された「できないっていうことも大事にしているんじゃないかな」って思います。僕は、全同教大会にレポーターとして参加させてもらって、自己開示を子どもたちにして自分の悩みを言って、そこからつなげていったというレポートをしたんですけど、自己開示を僕がすることによって、子どもたちが僕と同じように悩みを語ってくれるという方法として捉えているところがありました。でもなんかそれって違うなあ、でも何がどう違うんだらうなって感じながら、なかなか分からなかったんですけど、今いろんな人の話を聞いて、どの子どもたちにも大切なんで、僕は僕、あの子はあの子でそれぞれ悩みをもってるし、悩みを持ってることってことは変じゃない、何を持っててもいいんだということ。子どもたちが、分かる

のは、生れもって例えば病気とか発達の問題とか、それぞれの子どもの個性があるっていうことを子ども自身がまず分かってくれたらいいなあって思うんです。自己開示をすること自体がいいことじゃなくて、僕っていうか先生自身が、「いやあ先生昔こういうことがあって、先生の弟が自閉症で、そのことで小学生の時、すごい傷ついたことがあって」ってことを話したことによって、あっ先生だってそういうことがあるんだから、いろんな人に悩みを語ることとか、悩みがあることって変じゃないんだっていうふうに分かってくれたら、きっと、通常学級と交流に行って特別支援学級の子たちが交流する時とかも、違う視点で触れ合えてくれるようになるかなあって思っています。子どもたちが話してくれるっていう自己開示じゃなくて、子どもたちが、お互いの違いをもってるとか、できないってことを認め合える、そういう雰囲気をつくるための自己開示っていう方法あってもいいんじゃないかなって思っています。

2日目の総括討論C

協力者 私は、『継承』について、みなさんと話できたらなあというふうに思います。奈良県のあの中学校の話なんですけども、まあ昔から人権教育をすごい一生懸命頑張っているという学校です。昔と同じように取組はしている。しかし、子どもたちの反応が昔と違う。昔はこれで子どもたちが生き生きとした顔してたのに、その取組をしたにも拘らず、子どもたちが荒れている。そのようなケースが奈良県ではあります。それってやっぱり『継承』がしっかりおこなわれてるのかなあと思います。やっぱり子どもたちの姿から取組が始まったと思います。始められた先人達は、子どもたちの姿を変えたい。そのためにこんなねらいをもって、子どもたちと接していきたいという共通理解があったと思います。しかし、その取組だけが受け継がれて、そのねらいがもしかしたら希薄になっているのかなあと感じることがあります。今回は、全同教の時代から受け継いである人権教育の取組をどのように『継承』していったらいいのかっていうことについて話ができたらなあと思います。いきなりですので、ちょっと昨日の3本目の報告者に、ここでお話を伺いたいと思うんですが、昨日の報告の中で、家庭訪問をフットワーク軽く行きますというお話が出たと思います。でそれは、報告者の前の学校の先輩との取組の中で、家庭訪問の大事さとか、いろんなことを教えていただいたというお話がありました。それについてあとでお話を伺いたいと思います。それと、今日の3本目の話の中でも自己開示という言葉が出ています。これは、昔から大事にされている取組でもあります。で、お聞きすると、報告者は同じ学年の先輩と一緒に取り組む中で、先輩から教わった自己開示のことについて報告をされていますので、その取組をもう少し詳しく教えて

いただきたいなと思います。

報告者 (滋賀) レポートの中の最初、冒頭で、私自身の話をさせていただいたんですけれども、支援員として働いていた学校で、ある男の子とであって、その生活実態から、被差別部落の厳しい現実を目の当たりにしたっていうことを報告させていただきました。その子とであって、こういう子を見捨てへん先生になりたいということで、先生になる夢をその子にもらったんですけれども、実はその支援員をしていた小学校で新規採用され、その学校で4年間働かせていただきました。その初任校なんですけれども、被差別部落の子が約50%、で、70%を超えるクラスもある。本当に生活実態の厳しい子たちが集まる学校でした。私自身は、支援員時代、担任の先生がおられて、その教室の後ろで学習支援をしたり、生活支援をしたりする立場が3年間続いていたんです。採用されて担任になった一年目、あの子をほっとかへんようにしたいって言うていたそうした実態が、クラスの中でそんな子どもたちがたくさんいました。すごくしんどい子の多さ、それから、保護者とのつながりがなかなか自分の思うようにいかなかったっていうこととか、その地域に対する、他の地域のお母さん、お父さんからの差別があったりとかで、1年目は、そのことで本当に困って悩んで、日々実践の中、何も実践できないまま、悩んでばかりでした。そういったところで、先輩の先生方や管理職の先生方に、たくさん助けていただきましたと昨日もお話していたんですけれども、まずその学校は、しんどい子を学級を中心に据えるということを大事にしていた小学校でしたので、管理職の先生は、自分の思った通りに行動していきなさいと。責任は必ずこっちでとるから、自分がこういうふうな思いでそういう行動をとったんやということを明確にして保護者と子どもと接しなさいということを言うていただきました。また先輩方は、放課後になったら職員室から消えていくというか、車に乗って、個々それぞれの家庭訪問に行くっていう姿を見て、しんどい子への対応は、電話とかではなく、相手のおうちの方の表情とか、それから家の状況、生活実態とか、そのおうちで何がどう変化をしているのかということをまず知る、それからおうちの人とかこうこういうことで、その子が苦しんだり、しんどかったりするんやっていうことで子どもについて話す。それと同時に、お母さん、お父さんの思いもそこで共有し合う。親にも寄り添うっていうことを大事にしなあかんっていうことを教えていただきました。また、人とのつながりを人一倍望んでいながらも、なかなか素直になれない方たちが、被差別部落にはたくさんおられたので、2年目の学級が開けて最初の日、入学式の当日に、その学級で初めて出会う、で、お昼で下校したんですけれども、その日に、ある先輩の先生に、そのクラスにはやっぱり最初からつなが

っとかなあかん家があるし、今から一緒に家庭訪問行こかということで、一緒にそこの家に行って、今日から担任この先生やと紹介してもらったりする家庭訪問もありました。だからこそ分かる事実、だからこそ子どもたちが、そういう行動に出たんは、こういうことがきっかけやったんやなっていうことで、ここを外しては子どもの理解ができないということを初任校で学ばせていただきました。レポートでは2校目のことを書かせてもらったんですけれども、今も私その学校にいまして、その学校でも、なんかちょっと気になるなとか、なんかちょっとどうしたんやろうっていう気になった時は、直接行っておうちの方とお話をしたりすることを大事にしています。電話では伝わらないその時の表情とか、声の様子とか、それから家に行かないと、入っていかないと分からないような変化を見逃さずに、子どもたちと子どもたちのことを理解するという大切さを感じたので、今もそれを続けているところです。

報告者 (石川) 私は、先ほどのお話の中にもあったように、自己開示をするっていうのを、2年生担任していた時に、隣のクラスの先生から、こういうのもあるよっていうふう聞いたのがきっかけなので、その話をさせていただきます。去年組ませていただいた先生は、人権を大切にされている先輩です。その先生がされた実践を聞いたりだとか、その先生が全人教とか、いろんなサークルの中で聞いた実践を日頃から教えていただきました。職員室の中でも、今日一日あった出来事だったりとか、たわいのないことも、クラスで今こんなことあって悩んでるんですっていう話とかも、たくさん会話をさせていただいていました。その中で、AやBの悩みが出てきた時に、じゃあどうやってAやBの悩みを解決するかってなった時に、以前その先生から教えていただいた、自分をまず開示するっていうことであったりとか、子ども同士が自分の言葉で悩みを伝え合うっていうことやってみようと思えることができました。もともとは、方法として教えていただいたとは思っているんですけど、実際にそれをやってみようって思った時に、じゃあ何のためにやるのか、どんな言葉がけをしたらいいのか、本当に子どもが心から自分の言葉で話したいと思うためにはどうすればいいのかっていうことを考えていく中で、方法論でなくなっていくという感覚が自分の中にありました。それははっきりと言葉で言うのは難しいなあと思うんですが、実際に自分でやってみようと思って初めて方法論じゃなくなるのかなっていうのを私は感じました。なので私は何を『継承』していくのかというテーマをいただいた時に、やっぱり職員室の中でたわいのない会話を、毎日のようにさせていただいたこと、そんな中で、その先輩だけじゃなくって、職員室の中で、本当にいろんな先生方の会話が職員室でとっても多い学校なので、いろんな先生方から、

今日廊下で誰々がAにあったらこんな様子だったねえとか、それってAはこんなふうを考えてるんじゃないかなあとか、いろんなお話を先生方からいただく中で、私もこう自分なりに考えることができたことがすごく大きかったなあって思っています。私は、わりとこういう研修会の場のあとでも、いろんなこう実践を聞いて、あっすごいなあって、私もやってみたいなあってその場では思うんですが、なかなか持ち帰って実際にじゃあ自分ができるかって言われたら、あまり私は実践できないタイプで、良くないなあって思っているんですけど、そういうのよりも、職員室の中での会話で、こうしていったらいいなあって、その場でいろんな先生方と会話をしている中で、見つけた方法が今回の実践につながっているかなって思っています。実際、実践させていただいて、この私自身も自己開示をすることの大事さとか、子どもが実際に自分の言葉で悩みを語り合っていることの重みっていうものを感じています。私は今6年生の担任をしているんですが、その中でもやっぱりその考え方っていうのはぶれずに、自分の中にあるなっていうふうに思っています。高学年って全然違うんですが、やっぱり高学年とはいえ、自分の本音、悩んでること、子どもたちがたくさんあるなっていうふうに感じています。私にとっては、『継承』していただいたことが、ちゃんと自分の中に浸透してきているのかなあって思っています。

石川 今、『継承』っていう話を聞いて、今はその、いろんな先生と出会いとか、すごく考えてくれる管理職であったり職場っていうのが、その人権教育をするきっかけだとすれば、その人権教育の実践をした結果っていうものの一つに教師の変わり目っていうのがあると思うんです。最後のレポートのところで、自分が不登校であったことを子どもたちに語ることで見つめ直すことができた。で、本当に最後の最後に自分の父親との関わりをまた考えるようになったっていうような変わり目が書いてあったと思うんです。で、その変わり目を迎えた時に、現在、今6年生もってますよね、現在受け持っている6年生たちに対して、なんか子どもを見る目とかがどう変わったのかなっていうことと、それから、父親との関わりを見つめ直したと言ったので、じゃあ子どもたちと普段いる親、つまり保護者、親御さんの見方は、どう変わっていったのかなっていうのを聞きたいです。なんでこんなことを聞きたいかという、やった人権教育の実践が、その次の年とか、次々の年とかにどう生かしているかっていうことって、僕すごく大事だと思って、僕もレポート提案した年に1年生もってたんですけど、1年生相手に、僕がいろいろ語って、1年生ってすごく反応がいいんで、ああやっぱり人権教育やって良かったなあって思ってたんですけど、今年4年生もってて、なかなかこう僕が語っても子どもたち

はなかなか語り出してくれないという実情があって、どうしたらいいかなあっていう悩みがあったんです。話戻りますが、実践が、来年、再来年とかどう生かしているかということが分析できれば、人権教育を実践する良さっていうんですかね、っていうのをどう伝えていけるかっていうことが分かってくるんじゃないかなあってちょっと思っていて、それが今テーマになってる『継承』っていうところにつなげていけたらいいなあって思って質問します。

報告者 子どもを見る目がどう変わったかっていうところなんですけど、今ちょうど今もっている6年生の子たちが、私が初任の時に4年生でもったちょうどその子たちなんです。本当に4年生の時は、レポートの最初にもあったように、たくさん失敗だらけだったなって未だに思っている1年間でした。それは、やっぱり子どもたちが毎日のように喧嘩をしたり、昼休みのたんびにプンプン怒って帰ってくる男の子がいたりとかして、でもその都度こう話を聞いて何とかしてあげたいと思うんですけども、また次の日は喧嘩をしてくるっていう毎日の繰り返しで、結局そのまま1年間終わってしまっていて、まあ何もしてあげられなかったなあっていう思いでした。で、今6年生になってももちろん子どもたちがすごく成長しているっていうのも大きいんです。4年生の時に、これは言えないだろうっていうことをしてた子ども、やっぱり今私の教室にもそのままいて、1学期の間も、とんでもないことをする、していた子もまあいたんですけど、まあ多分こんな実践をする前の私だったら多分その場で話を聞いて終わってたと思うんですけども、今年は、そういうことをしてしまう子と1対1で話をする時間を改めて全部解決したあとにとって、やっぱりその子、本人になんでそんなに友達が嫌がるようなことを、分かっているはずなのにそういうことするんや、もしかしたらC自身もなんか悩んだりすることかなんかあって、自分に余裕がなくなってそういうこと友達にするんじゃないかって今年聞いたことがあって、その時、すごくクールでいたいタイプの男の子だったんですけども、その時に初めて私の前で、その子が涙を流して、別に言葉にするわけじゃなくて、悩みを話すわけでもなくて、ただただ泣き始めて、きっと何か苦しいものがあったって、でもそれを出せずにずっときたんだらうなっていうことを感じました。そうやって自分が実は辛いっていうことを、涙を通して誰かに表に出せたっていうことは、すごいその子にとっても大きかったのかなと思っています。それが1学期後半だったので、2学期になってその子も変わって、表情も明るくなったのを見て、やっぱり私の中では、2年生の担任をする時のこの実践の本人の思いを、本当の本心、悩んでるところを引き出すっていう部分に、ちゃんと今年も生きてるのかなあっていうのを大切にしていきたいなあって思っています。親

への見方っていうところなんですけども、もちろん今年、今も父の状態は治っておらず、やっぱり良くなったり悪くなったりをすごく繰り返して波がすごくあって、ちょうどこのレポートを書いている時がすごい波が沈んでいる時期で、このレポートの発表を県で発表させていただいた時期には調子が良くなっていたんですけど、また最近調子が悪くなっています。そういうのを見ていて、まあ最初は仕事について責任感というか、そんなに自分のせいって思わなくてもいいのになって、父の考え方をちょっと否定してしまっていた部分があったんですけども、やっぱりこういう自分の実践のレポートを発表させていただいて、いろんな方からもアドバイスをいただいたりする中で、自分で改めてこう自分、人の真の心の奥で悩んでいる部分を聞くっていうことを考えた時に、父に置き換えた時に、やっぱり責任をすごく感じてしまっている父を否定しちゃいけないなって思いました。父の様子を見て、あっ今日は多分調子が悪いんだなああって思ったら無理に話しかけたり、もっとこうすればいいやんと前は言っていたんですけども、そういう言うのが逆に負担なのかなって、父の気持ちを考えながら接するようになったかなあと思います。それが私の中では、私自身の変化かなと思います。

埼玉 実は、自分は、8月に癌の手術で前立腺を摘出したという経験があります。それについては、子どもたちにはカミングアウトしているんですけども、先日ピンクリボンの会がありまして、その会の方に命の授業をさせていただきました。ぜひ校長先生の体験を話してくださいっていうことで言われてカミングアウトしたんですけども、やはり癌っていうとサバイバー差別というのが最近はあるということで、そのサバイバー差別は、やはり無知から来てるっていうことなんです。そういう差別をしっかりと伝える。無知であるとやはりだめだなあ、そんな気がしました。大人が今考えてないっていう、そういうことから、人権教育が後退しているんじゃないか、そんな話もありました。自分の子を見てもですね、昔は、みんな、いろいろな会に入って、それで地区の方が一生懸命闘っていた。最近、保護者でその闘っている方っていうのが本当に少なくなってきたっていう現状があります。だから、カミングアウトというのが、もし昨日のお話では、小4の時に、お母さんから真剣な顔で、あなたはこうだっというの伝えられたっというお話を聞いたんですけども、それがもしかしたら、うちの地区はできてないんじゃないかな、そんな気がしています。そういったところで、先ほど若手の育成っていうことであつたんですけども、自分は管理職としてですね、現地の人にしっかりと聞くことで、差別の実態を、先生方、若手の先生方にしっかりと聞いてもらう、そんな機会がとれたらいいな。今回参加して、そんな思いを強くしました。

大阪 私もやっぱり『継承』というところでは、ずっと悩みながら自分のできることを見つけてやってきているところです。ここ10年ぐらい、大阪市では各校、団塊の世代の退職者がかなり多くあり、その分、新規採用の若い人たちが新採用として入ってくるというのが年々続いています。これはどこも同じような傾向があるんじゃないかなあと思ってるんですけども、自分の若い頃のことを振り返ってみると、新任で入った若い先生の周りには、人権教育のことについて教えてもらえる、あるいは気づかせてもらえる先輩が多数いたんです。でも今、現状を見ると、人数の割合が逆転してるので、一人の若い新任の先生から見ると、教えて、人権について教えてもらえる先生の数っていうのは、すごく限られています。伝えなければならぬ人がものすごく多いっていうのが現状の中で何ができるんかって考えているところです。それで、今、学校現場にいる者として、やっぱり伝えていかないといけないんだけど、ともすると、伝えたいのは、特にここに会場に来られているような方々は、みなさんすごく熱い思いを持っておられるので、思いをすごく強くぶつけてしまうところもみなさんもってるんじゃないかなと思うんです。若い方から言うと、思いを先行させてぶつけられると、なかなかそれを受け止めるのって、最初難しいところがあるので、やはり今は、今現任校では、新採用の先生がたくさんいて、初めての学校で学ぶというところという、何か新しく先生になって、一校目でもできるようなところを、形としても伝えていかないといけないのではないかなと思っています。まずこれやったらできるんちゃうというふうなところを、思いも大事にしてほしいんですけども、そこを伝えていかないと、なかなかやってみようにはつながらないっていうふうに感じています。逆に、この会場に若い方がたくさん来られていてありがたいなと思うんですけども、若い人たちは、ベテランの先生が教えてくれる形にばかりとらわれずに、なんでそんなことを、どんなふうに考えて伝えてくれるんやろか、どんな思いでこれをつくってきはったんかなっていうふうに、伝えてくれる人の思いを押し量って聞いていくようなつながりがつくれば、いいんじゃないかなと思ってるのが一点です。二点目は、今、私は被差別部落を校区に含まない学校に勤務しています。どこの学校でも人権教育がなされなければならない。もちろん、その子どもの実態、目の前にいる子どもの実態に即してですけども、そうであるならば、やはりそれができるとしたら、いろんな取組がこの全人教で報告されるんやけども、授業で実践をしていかなければならないんじゃないかと思っています。授業をつくっていかなければならない。でも、初めての人、人権教育の授業つくってみたい、やってみて、って言うてもなかなか難しい。教科書や指導書があるわけでもない。

まして教科書があっても教科書を教えるんじゃないくて、教材を活かして子どもに合わせてやっついていかないといけないんで、難しいと思います。だから僕自身は、今しようとしてるのは、まず自分は若い頃、なんか見せてもらったなあ、授業を見せてもらったなあ、一緒に同じ学年の先生に、一緒に考えてもらったなあ。で、自分がやったら見てもらって、指導してもらったなあっていう経験がやっぱりあります。でも今それが学校現場でできるところってすごく少ないんじゃないかと思っています。今私が自分ができることとして、毎年一回校内ですが公開授業として人権の授業をしています。今、現任校が6年目なので、毎年テーマを変えて、仲間づくり、平和学習、部落問題学習、障害者の問題、在日の韓国朝鮮の問題を取り上げた授業を、一年ずつテーマを変えて、授業を見せるという形を、自分はこれが合ってるかなあと考えてやっています。だからそういうことを積み重ねていかないといけないんじゃないかなあと考えています。

福岡 先ほどからずっと『継承』っていうことがあって、すごい難しいなと思っています。教えてほしいと思っている人たちは、なんかハウツーっていうか、やり方とか、方法論とか、そういうところをすごく求めていて、でも、こう伝えたい側の思いとしては、思いだったりとか、なんかもっとこう目に見えなかったりとか、形に表しにくいものだったりするところが、すごくベースになってたりするので、そこがととっても難しいなあって感じています。学校の生活ってライブ感があるなあと考えています。ライブ感があって、アドリブが要求されて、臨機応変さが要求されてっていう中で、こうやっていってるのが日々かなあと思っています。その中でたくさん失敗をしていくし、うまくいかないこともしていくし、とんでもないと思うことも起こったりするんですけど、そこを、そこで終わらせないために次何をしていくかっていうのを、常に前向きに行くっていうのが、本当に大事だなあと考えています。自分がしてることとしては、今、私は児童支援加配という立場なので、支援加配としての視点から見たいろんな気づきとか、啓発とか、そういうのを、おうちの方向に通信とかにして毎週一回発行してるんです。それを先生方にもおうちに配っていたら時々聞かれます。これって何なんですか、こういう姿ってどうやったら出てきたんですかと聞かれたりした時に、伝えられることとかを伝えていくということを日常的にはしていったらなあって思っています。それと、自己開示とかいうことが出てくるんですけども、自己開示をすることが目的で学級をつくっていくんじゃないんじゃないかなと思っています。なんか自分の経験上、ある日突然そういう時がやってくるというか、一番極端に早かったのは、入学式の翌日、初めての健康観察をする時に、健康観察っていうのはねっていうこと

で一年生に説明しました。心と身体が、どんな様子で学校に来てるかなっていうのを、先生だけじゃなくて、クラスみんなで確かめるのが健康観察だよって言ったら、ある男の子が「ストレスが溜まっています」って言いました。その「ストレスが溜まっています」と言った男の子に、「ストレスってなあに」と他の子が聞きます。そしたらその男の子が、「お姉ちゃんと自分が喧嘩をしたけど、自分ばかりおうちの人に怒られて、お姉ちゃんは全然怒られなくて、ニヤニヤしてたから、僕はストレスがたまっています」。なるほどなあって思うことを口にしします。突然そうやって家の中の様子を一人が話し出すと、もう次の日から「ストレスが溜まっています」が流行ってしまって、健康観察のたびに「ストレスが溜まっています」と言って、自分の生活の中でのいろんなことを話し始めてしまって、学級づくりも何もないままに始まった。自分の経験の中では一番短い期間で、そういうことに遭遇しました。でもそれは、就学前の保育園、幼稚園の時の関わりの中で、きっと子どもたちが人間関係生活をつくっていったって、生活に触れていくという体験があったから出てきたんじゃないのかなあって後になって思いました。が、毎日健康観察で1時間目の半分までつぶれるので、どうしようと思っていたら、先輩先生が、国語の「話す・聞く」でやりなさいって言うてくれました。そういう緩やかというか、実際本当に話して聞いてるんですね。なので、そういう緩やかさが、過去だけかなあと思ったら、今でも、突然あのう男の子が、日常会話の中で、「パパにこうしてもらってああしてもらって」って言って、他の隣の子に「お前のパパは」って言ったら、「俺んち離婚しておらん」って言って、あのポロツと言って、で、「えっ離婚したらパパがおらんとすると」とか「おお、そうよ」って、「何年生の時からおらん」「それってさびしくない？」とかの会話がそこで始まりました。そんな感じで、突然やってくるんだけど、やってくるにはやってくるだけの、きっと何かのベースがあるはずなんですよね。ちなみに、健康観察の時に、ええっと「ストレスが溜まっています」って言った子たちの世代は、今年31歳になります。その子たちは、1、2年生のクラスの同窓会を未だにやっています。だから表面的なつながりじゃなくて、深くつながっていくっていうことは、ずうっとお互いの信頼につながっていくんだなってことも感じているところです。

大阪 私も20何年のキャリアになってますけども、『継承』のことで言えばいろんな課題があるし、若い先生方に伝えたらなあっていうことをお話したいなあと思います。ある事件を巡って子どもを指導しなければならなかったのも、朝からもうずうっと夜まで、子どもの聞き取りをして、もう嘘をついていると分かっていたから、本当のことを言わせるために粘ってたんです。もう日が

暮れてですね、7時ぐらいになった。それでも嘘つくんです。で、ずっと1日中その子といました。いろんな話をして。ムラの子やったんですけど。絶対に嘘やっということが分かってるんですけど、言わないんです。で、どうしても言わせなあかんかったから、ずっと粘ってたら、その時にいた先輩方が、「ちょっとおにぎり食べさせろ」と。いろんなこと言ってくれて、なおやってたんです。7時半ぐらいやったのかな。そしたらお父さんが、まあ父子家庭なんですけど、学校にやって来て、「いつまで話聞いとんねん、ぼけ！」みたいな感じでやってきたんです。廊下の椅子バーン蹴ってね、廊下びしゃびしゃになってね、私はそれ全部聞いてて、で、先輩も「まあまあまあお父さん」ってやりながら。「もう連れて帰る！」って言うて、私の所に来て「お前、なんや！」ちょっと酔っぱらってはったんですけどね。その後、子ども連れて出ていく時に、「待ってください。僕はこの子絶対嘘ついてると思うから、ほんまのこと言わしたいんです」「うるさいんじゃ！」って怒ってるんです。その時この僕に「ぼけ！」って言ったんです。その時にドキッとしたんだけど、何故ドキッとしたのか分からないんだけど、先生としてやって、この子のためやとやったんやけど、なんかやっぱ間違ってたんかなあみたいな。その後、お父さんは帰ったんですが、先輩に、もう何て言われるかなあとか思ったんですけど、「お前、なんでこういうふうになんかボケって言われたんか聞いてこい」って言われたんです。それを聞きに行くってどういうことなんかなって。その時に、一人ではと思って、先輩と一緒にいかしてもらって聞いたら、お父さんは、高校時代に、退学するやんちゃなことをしてたそうです。で、退学をすることが決まって、学校を出ていく時に、職員室のどこからか、「あの子、退学することになったらしいなあ」って。「良かったなあ」みたいな、そんなこと聞いたみたいなんです。その時にですね、「高校のことやけど、先生のことみんなきらいになった」って、言わはったんです。こういうことがあったんやっ初めて知って、そのお父さんの思いを、気づかず生活してました。その時に先輩に教えてもらったんが、「一番言いたくないことが、聞いてほしいことやねんで」。心に沁みたんです。そのことをなんとか、今、いろんな場面で、いろんな子どもとであう時に、この子の言動とかにはわけがある。親がこういうふうにしてるから、こんなことなってるん違うかなっていう、なんとなく自分の予想を立てて関わりたいなっていうふうにしてます。そのことを今日思い出しました。今いろんな状況にある子ども、大人がどんなことをやっているかという、何かがあると思っかけて付き合いたいなと思っかけてますし、『継承』というふうには思いませんけど、私たち教員の評価優先されてるので、評価というような面で、ちょっと苦しい場面に立っているとこもありますの

で、若い先生が、どんな思いもってるのかなあ、どんなことで今悩んでる、心止めてるのかなあということのを予想を立てて、したいなあと思っけています。

大阪 僕が新任で入った中学校4年目ぐらいだったと思うんですけど、今から20数年前、ムラの子がいてまして、当時解放子ども会で、彼は中3で、一生懸命勉強を、学校終わったら部活野球部終わって、青少年会館行って一緒に勉強してました。で、まあ、担任の先生がある時、まああの解放子ども会で自分の立場とか勉強してたので、ある日、担任の先生が、自分のことを本人が伝えてもいいかなあって言うてきました。自己開示で言えば、彼はみんなに伝えたかったことがあったと思うんですけど、「ああいいですよ。どうぞどうぞ」って言えなかった自分がいました。僕にとっては、すごくずうっと心の一番底のところに残っています。「先生、聞いて聞いて」って子どもたちはよう言うてくるんですけど、その深刻な思いについての言える雰囲気をつくっていくのが、自分たちの仕事かなって思っけてます。